

ヴィゴツキーの概念発達論における認識的発達と道徳的発達の統一

教職開発コース 吉 國 陽 一

Unification of epistemic development and moral development in Vygotsky's theory of concept development

Yoichi YOSHIKUNI

The aim of this paper is to show how Vygotsky assumed epistemic development and moral development to be unified in the process of concept development. Thoughts on epistemic development and moral development as a unified process, has been pointed out to be present in Vygotsky's theory of play. In this paper, the author attempts to point out that Vygotsky assumed epistemic development and moral development to be unified in the process of concept development as well. Vygotsky presumed that recognition of necessity was the key to acquire freedom and thus, brings about moral development. According to Vygotsky, development of higher forms of conceptual thinking opens up the way to the recognition of the necessity of external reality, the internal process of oneself, and others.

目 次

- 第1章 はじめに
- 第2章 認識的発達と道徳的発達の統一—遊び論から概念発達論へ—
 - A 遊び論における必然性の認識を通した道徳的発達
 - B 概念的思考の発達による必然性の認識
- 第3章 概念的思考の発達による必然性の認識を通した道徳的発達
 - A 外的現実の認識
 - B 自己と他者の認識
 - C 必然性の認識から行為の支配へ
- 第4章 おわりに

第1章 はじめに

本稿の目的は、ヴィゴツキーの心理学研究において概念的思考の発達が認識的発達と道徳的発達を統一した過程であると考えられていたことを検討することにある。従来、道徳的発達はヴィゴツキーの遊び論との関係で論じられてきたが、本稿では遊び論の中で語られてきた認識的発達と道徳的発達の統一的過程が、概念的思考の発達においても想定されていたことを指摘する。本稿の主張は従来、認識的発達の過程と考えられてきたヴィゴツキーにおける概念的思考の発達を、道徳的な発達をも含んだより包括的な人間の心理発達の過程として捉え直す意義を有している。

はじめに、ヴィゴツキーの遊び論に見られる、子どもの遊びにおける認識的発達と道徳的発達の統一的過程を、先行研究における解釈とともに検討する。そしてヴィゴツキーが遊び論において論じてきた必然性の認識による自由の獲得という、認識的発達と道徳的発達の統一的過程を、概念発達論において最も高次の段階に至るものと考えていたことを指摘する。(2章)

次に、ヴィゴツキーの概念発達論の検討を通して、ヴィゴツキーが概念的思考の発達によって可能になると考えていた必然性の認識について検討する。ヴィゴツキーは概念的思考の発達によって、外的現実、自己、他者という三つの領域における必然性の認識が可能になると考えていた。これら三つの領域における必然性の認識に基づく自分自身の行為の支配、つまり自由の獲得が概念的思考の発達に伴う道徳的発達であるということを示す。(3章)

最後に、本稿の主張の総括を行い、残された課題について検討する。(4章)

第2章 認識的発達と道徳的発達の統一—遊び論から概念発達論へ—

A 遊び論における必然性の認識を通した道徳的発達

ヴィゴツキーが子どもの道徳的発達について明示的に述べているのは、子どもの心理的発達における遊びの意味について述べられた二つの論文、「子どもの心理発達における遊びとその役割」¹⁾、「遊びに関する

摘要」²⁾だけである³⁾。これら二つの論文に見られるヴィゴツキーの道徳的発達に関する考え方は、ヴィゴツキーが論文の中で言及しているスピノザの哲学との関係で、神谷栄司の著書『保育のためのヴィゴツキー理論－新しいアプローチの試み』⁴⁾、『未完のヴィゴツキー理論－甦る心理学のスピノザー』⁵⁾や堀村志をりの論文「遊びのルールに見るヴィゴツキーの倫理－自由意志概念をめぐるデカルトとスピノザの議論を通じて」⁶⁾において論じられている。

ヴィゴツキーは遊びを、子どもが生活の中では満たすことのできない欲求や願望を、一般化された形で虚構場面の中で遂行するものであると考える。虚構場面の創造にはルールの存在が伴うが、ヴィゴツキーは遊びの発達をおまごとのように「顕在的な虚構場面と伏在的なルール」⁷⁾によって特徴づけられる遊びから、チェスやスポーツのように「顕在的なルールと伏在的な虚構場面」⁸⁾によって特徴づけられる遊びへの移行によって起きると述べる。ここで、ヴィゴツキーは子どもの道徳的発達を遊びのルールとの関係で論じている。ヴィゴツキーはピアジェの道徳的発達に関する研究で指摘された外的ルールと内的ルールの区別に言及しながら、大人から一方的に押し付けられる外的なルールに対し、遊びにおいては大人や他の子どもとの相互作用の中で子ども自身が確立するルールに対する態度、すなわち内的ルールの存在が特徴的であるという。

遊びにおいては、棒を馬に見立てて遊ぶなど、視覚的世界からの意味的世界の分離が可能になる。ただし、遊びにおける視覚的世界と意味的世界の分離は思考の中で行われるのではなく、行為の中で行われるため、棒が馬の役を演ずることができても、郵便ハガキは馬にならないといったように、現実場面に立脚している必要がある。これをヴィゴツキーは「幼児期前期の純粋な場面的束縛と、現実場面から切り離された思考との中間に位置する、遊びの過渡的性格」⁹⁾であると分析する。

こうして視覚的世界から意味的世界を分離することにより、子どもは物だけではなく、行為の意味も現実生活における意味から切り離し、現実生活とは異なる遊びのルールに従うことができるようになる。子どもは遊びの中で、キャンディーは食べられないものを表すから食べてはいけないというように、ルールに従うことで直接的欲求に反して行為し、遊びによるより大きな喜びを得ることができるようになる。ヴィゴツキーは、このように直接的欲求の満足よりも大きな喜

びをもたらしてくれる、子ども自身によって確立されるルールに対する態度をピアジェの言う内的ルールに重ね合わせる。

「こうして、遊びの本質的指標は、感情になったルールである。『感情になった観念、情熱に転化した概念』というスピノザの理想の原型は、遊びの中にある。遊びは、随意性と自由の王国である。ルールの遂行は満足の源泉である。ルールは、もっとも強力な衝動として勝利する（スピノザを参照のこと－感情は最も強力な感情によって打ち負かされる）。ここから、内的ルールとはなにかが明らかになる。すなわち、それはピアジェが述べたように、内的な自己規制、自己決定のルールであり、物理学的規則として子どもが従うようなルールではない。いいかえれば、遊びは子どもに新しい形態の願望をもたらす。すなわち、遊びは、願望を虚構の『自分』－遊びにおける役とルールに関連づけながら願望することを教える。それゆえ、遊びのなかでは、明日には子どもの平均的水準、子どものモラルになるような、最高の達成が可能になるのである。』¹⁰⁾

感情になったルールによる内的な自己決定。この説明の背景には、ヴィゴツキーのスピノザ哲学に対する理解がある。前述の堀村の論文と神谷の著書においてこのことが考察されている。

堀村は『情動の理論』においてヴィゴツキーが展開しているスピノザ哲学についての考察を踏まえ、ヴィゴツキーの遊び論における道徳発達観が、心身一元論の立場から「身体もしくは衝動を否定せず、ありのままに理解する理論体系」¹¹⁾であるスピノザ的な倫理学に立脚していると解釈する。これは心身二元論の観点から自由意志による身体もしくは衝動の抑制を説くデカルトの道徳論とは鋭く対比されるものである。堀村によればここでヴィゴツキーが述べているのは、ともに身体に起源をもつが、一方のルールの遵守に基づくより高次な感情による、より低次な感情の克服である。堀村はスピノザの『エチカ』の第四部定理八「善および悪の認識は、我々に意識された限りにおける喜びあるいは悲しみの感情にほかならない」¹²⁾と、その証明部分を引用しつつ、スピノザにおいては感情と認識が一体となっていると述べる。そして、ルールの認識と喜びを結びつける上記のヴィゴツキーの言葉の背景に、こうしたスピノザの思想の存在を読み取ってい

る。堀村はヴィゴツキーにおける道徳を「情動と一体化した道徳」¹³⁾であると述べている。

神谷は上記のヴィゴツキーの引用を、『エチカ』の第五部定理二十七「第三種の認識（神の認識）から、存在しうる限りの最高の精神の満足が生じる」¹⁴⁾と結びつけて論じている。また、神谷は『エチカ』第一部定義一〜八に対する考察から、スピノザにおける神の本質が自由なる必然性にあると指摘する¹⁵⁾。デカルトの哲学において自由は必然性に対立する自由意志であるが、スピノザの哲学においては自由は認識された必然性であると考えられる。ここから、神谷は上記のヴィゴツキーの言葉における「感情になったルール」を自由なる必然性の認識から得られる喜びであるとす

「虚構場面をともなう遊びに即して言えば、そこに伏在するルールは、生活的なごっこ遊びの場合には、遊びのなかに登場する個々人の生活のなかでの必然性を反映したものであり、劇遊びの場合には、作家によって描かれたその場面での登場人物の行動の必然性のことである。・・・(中略)・・・《自由なる必然性》の認識から得られる喜び—これが「感情となったルール」(および「情念に転化した概念」など)の核心であり、また、遊びのなかで生起している事柄でもある」¹⁶⁾

ここで、ルールは必然性と読みかえられている。内的ルールとは遊びの中で子どもに認識された必然性なのである。認識された必然性はそれ（ここでは遊びのルール）に自ら従って行為することを喜びとする新たな感情をもたらす。つまり、「感情になったルール」とは、新たな認識の形成によって生み出された新たな感情であると考えられる。ヴィゴツキーの遊び論において認識の発達、感情の発達と一体となっており、認識された必然性に基づく自己規制や自己決定、つまり自由の獲得としての道徳的発達もまた含んでいる。

B 概念的思考の発達による必然性の認識

こうした発達における認識、感情、道徳の関係は遊び論のみならず、ヴィゴツキーの心理学全体を貫いているというのが本稿における仮説である。なぜなら、ヴィゴツキーは心理発達を個々の心理機能の変化ではなく、機能間の関係によって構成される心理システムの変化であると考えており、心理システムには常に思考と感情の関係が含まれているからである。ヴィゴツ

キーは論文「心理システムについて」において、嫉妬の感情を例に挙げて思考と感情の関係について以下のように述べている。

「表面の知覚がどこで終わり、これはある対象だという理解がどこで始まるか（知覚において、視覚的場の構造的性質と理解は統合され、一体となっている）を識別することが不可能なように、我々は感情の中で嫉妬を純粋な形で経験することではなく、常に概念によって表現された連関を自覚しているのである。・・・(中略)・・・感情あるいは情動の歴史的発達は、主要には、それらが与えられた当初の諸連関が変更され、新しい秩序と諸連関が発生するという事実にある。スピノザ(1677/1995, p.258) が正しく述べたように、わたしたちの感情の認識は感情を変化させ、それを受動的状態から能動的状態へと変化させるのだと我々は主張した。」¹⁷⁾

発達が機能間の関係の変化として起こるため、思考と感情の発達は一体となっている。そして、思考と感情の発達は感情になったルール、つまり認識された必然性に基づく自由の獲得としての道徳的発達を促すのである。

このように考えると、ヴィゴツキーが晩年に力を注いだ概念的思考の発達の研究は、認識における発達のみならず、感情および道徳的発達を含んだより包括的な心理的発達の過程を扱った研究であったと解釈できる。そこで問題となってくるのは、神谷が遊び論の中で指摘した「自由なる必然性」の認識を概念的思考の文脈の中でどのように解釈するかということである。神谷は遊び論の中で子どもが認識する遊びのルールによって表現される生活や劇の登場人物の必然性と、スピノザの第三種の認識を結びつけて論じていた。しかし、第三種の認識がスピノザの哲学において唯一の実体である神の認識をもたらす精神の最高の徳と位置づけられていたこと、スピノザが第三種の認識を、ヴィゴツキーが高次の思考と位置づける言語に媒介された思考とは異なる直観知と考えていた¹⁸⁾ことを踏まえれば、両者の間にアナロジー以上の関係を見て取るのは拡大解釈となるだろう。ここで注目すべきは認識の内容ではなく、あくまで自由と必然性の認識との関係である。

必然性の認識による自由の獲得というテーマをヴィゴツキーは概念発達論の文脈で論じている。ヴィゴツ

キーは『思春期の児童学』¹⁹⁾において自由とは必然性の洞察であるという『反デューリング論』におけるエンゲルスの主張に依拠しつつ、高次の概念的思考こそが必然性の認識をもたらし、自由な行為を可能にする述べている。

「確かに必然性そのものはまだ自由とは言えない。しかし、自由は必然性をその前提としており、自らのうちにそれを止揚するものとして含んでいる。概念形成の機能がなければ必然性の認識もなく、したがって自由もない。概念においてのみ、また概念を通してのみ、人は事物や自分自身に対する自由な関係を獲得する。エンゲルスはこのように述べる。“したがって自由とは、自然的必然性の認識に基づいて、われわれ自身と外的自然 (*Naturnotwendigkeiten*) を支配することである。だから、自由は必然的に歴史的発展の産物である。動物界から分離したばかりの最初の人間は、すべての本質的な点で動物たちと同じように不自由であった。しかし、あらゆる文化上の進歩は、どれも自由への道であった” (Ibid.)」²⁰⁾

ここでのヴィゴツキーの言葉から、神谷が遊び論の中で指摘した必然性の認識による自由の獲得としての道徳的発達、概念的思考の発達においてその最も高次な段階に至るものと解釈することができる。では、概念的思考によって可能になる必然性の認識の内容とはいかなるものか。次章ではヴィゴツキーの概念発達論の考察からこのことを明らかにしていきたい。

第3章 概念的思考の発達による必然性の認識を通じた道徳的発達

A 外的現実の認識

ヴィゴツキーの概念発達論が展開されている主要な著作は『思春期の児童学』と『思考と言語』²¹⁾である。『思考と言語』は、第5章で実験-発生的方法を用いた概念発達研究について述べられ、第6章で科学的概念に関する作業仮説が示されるなど、ヴィゴツキー自身による具体的な研究の成果を反映したものになっている。一方、『思春期の児童学』では思春期の心理的発達の中心に概念的思考の発達があるとの仮説の下、思春期の心理的発達に関わる先行の学説の批判的検討を行っている。『思考と言語』のように実験等による科学的な裏付けには欠けているものの、『思春期の児

童学』はマルクスやエンゲルス、レーニンといった思想的背景を成す論者との関連の中でヴィゴツキーが概念的思考によって可能になる認識や、人間の心理的発達において概念的思考の発達が果たす役割をどのように考えていたかをうかがうことができる内容となっている。本稿では主にこの『思春期の児童学』に依拠しつつ、概念的思考によって認識される必然性の内容を明らかにしていきたい。

ヴィゴツキーはこの著作の中で、複合的思考、概念的思考といった思考の形式と、こうした思考の形式によって可能になる思考の内容を切り離して論じることができないということを繰り返し強調している。つまり、概念的思考において認識される必然性の領域は、概念的思考という形式においてのみ認識可能になるものである。ヴィゴツキーによれば、概念的思考とは一般化によって世界の客観的連関を理解することを可能にする思考形式である。ヴィゴツキーはレーニンの『哲学ノート』を引用しながら、概念的思考について以下のように説明している。

「“(抽象的な) 概念をつくり、それを運用するということはそれとともにすでにそのうちに世界の客観的連関の合法則性の観念、確信、意識を含んでいる”とV.I.レーニンはヘーゲルの『論理学』に関するノートで述べている。“この連関のうちから因果関係だけを特にぬきだすのは、ばからしいことである。概念の客観性、すなわち、個別的なものおよび特殊なもののうちにおける一般的なものの客観性を否定することはできない。したがってヘーゲルは、概念の運動のうちに客観的世界の運動の反映を研究するとき、カントその他よりもずっと深いのである。ちょうど単純な価値形態、すなわち一つの特定の商品と他の一つの商品との交換という個別的な交換という行為がすでにそのうちに、全ての主要な諸矛盾を含んでいるように、一単純な一般化、最初でもっとも単純な概念 (判断、推論etc) の形成は、人間が世界の客観的連関をますます深く認識していくことを意味する。ここにヘーゲルの論理学の真の意義と意味と役割をもとめなければならない”(全集、第29巻、pp.160-161.) このように概念は、はじめて本来の意味での現実の認識をもたらす。というのも概念は、認識される現象の法則性を示唆しているからである。概念は、実際に子どもを体験の段階から認識の段階へと移行させる。」²²⁾

このように、ヴィゴツキーは概念による認識を客観的世界の運動の反映をもたらすものとする。ヴィゴツキーはレーニンに倣って客観的現実を事物の連関や相互作用によって成り立っている考え、概念的思考をこうした現実を構成する諸連関を人間の意識に反映するものであると考える。

ヴィゴツキーは概念的思考と現実との関係を、形式論理学における両者の関係との対比をもとに説明する。形式論理的な発想に立つならば、概念は具体的現実から離れた人間の意識による知的構成物であり、より一般的で外延の広い概念ほど現実の豊かさから離れた内包の貧しいものとなる。ヴィゴツキーは分離する抽象と、一般化する抽象という二種類の抽象を区別する必要があると述べる。分離する抽象は形式論理的な概念に対応しており、概念は事物の複合から個々の特徴を分離することによって形成される。一方、一般化する抽象は、ヴィゴツキーが拠って立つ弁証法的な論理学における概念に対応する。ヴィゴツキーはこれを、抽象の力を顕微鏡の力に例えたマルクスに倣って用いている。一般化する抽象は概念間の関係を作り上げることによって、直観によっては捉えられない現象の奥に潜む諸連関を見出し、その本質を洞察することを可能にする。

「真の概念は複雑な内容をもった客観的対象の形象である。対象をそのすべての連関と関係の中で認識するときのみ、その多様性が多くの定義を通して言葉の中に、全体的形象の中に総合されたときのみ概念は発生する。弁証法的論理学の教えに従えば、概念は一般的なものだけではなく、個別的なものも特殊的なものも含んでいる。観察による直接的な対象の知識とは異なり、概念は対象の定義で満たされている。それは我々の経験の合理的な加工の産物であり、対象に対する媒介された知識である。概念の助けによって何かの対象について考えるということはその対象を概念の定義によって示される媒介的な連関や関係の複雑な体系の中に取り込むことを意味する。」²³⁾

このように、ヴィゴツキーの考える概念的思考においては、言葉による定義によって概念間の関係を指し示すことにより、現実から離れる抽象ではなく、現実の本質をより深く捉える抽象を可能にするのである。ヴィゴツキーはこのことを幼児の量の知覚と、数概念の比較を例に説明する。幼児による量の知覚は対象群

の形や大きさといった具体的知覚、数的形象に基づくのだが、数概念を獲得することにより、九が三の二乗であり、三つに分けられるといったように、個別的な数を他の数との関連の中で一定の位置を占める数として理解することができる。概念における一般化は形式論理学の場合とは違って、個別的なものや特殊的なものを排除するのではなく、概念間の関係を通して、それらが含まれる連関を明らかにし、より深く理解することを可能にするのである。

B 自己と他者の認識

このように、発達した概念的思考は一般化を通して外的現実を構成する諸連関の深い理解を可能にする。一方、ヴィゴツキーは概念的思考という思考形式の発達によって可能になる思考内容に、さらに二つのものがあるという。自分自身の理解、つまり自己意識と、他者の理解、つまり社会的意識の世界である。

「概念は体系をもたらす、外的現実の認識の基本的な手段となるだけではない。それは他者の理解、歴史的に構成された人類の社会的経験の適切な把握のための手段でもある。概念においてのみ、少年は社会的意識の世界を初めて理解し、体系化するのである。この意味において、言葉によって考えることは、個人的思考を一般的思考に合流させることを意味すると言ったフンボルトの定義は完全に正しい。思考の完全な社会化は概念形成の機能なのだ。最後に、概念形成への移行と関連して少年たちの思考に発生する第三の領域は、ここではじめて体系化し、認識し、整理することが可能になる自分自身の経験の世界である。ある著者は十分な根拠をもって、意識は自己意識とはまったく異なる現象であり、意識が人間生活に通常備わる特質であるのに対し、人間の自己意識は遅くに発達すると述べている。」²⁴⁾

概念的思考の発達は、外的現実の認識を豊かにするのみならず、自己や他者の認識を可能にするのである。ヴィゴツキーによれば、概念的思考によってはじめて自分自身の世界と周囲の世界を分離し、理解することが可能になるのだという。概念的思考と自己、他者の理解はどのようにかわるのだろうか。まずは概念的思考と自己意識の関係について見ていこう。

ヴィゴツキーは、自己意識という哲学的概念を心理学的に説明している。それは自分自身の内的操作の自

覚と制御を可能にする、概念的思考を中心に構成される心理システムである。第 1 章でも述べたように、ヴィゴツキーは心理的発達を個々の心理機能の変化ではなく、それらの関係における変化と考える。

「われわれは自己意識への移行、これら（注意や記憶や概念による思考）の過程の内的統制への移行がこの転換期（思春期）の機能発達の真の内容であることを見てきた。もし、この発達の新しいタイプが何であるかを規定するならば、それは異なる機能間の新しい連関、新しい関係、新しい構造的連結の形成であるということができる。・・・（中略）・・・たとえば、われわれは記憶の発達が、何よりもまず記憶と思考の間に生じる新しい関係の中で形成されることを見てきた。われわれは子どもにとって思考することが記憶することを意味するとすれば、青少年にとっては記憶することが思考することを意味すると述べてきた。適応という同一の課題が異なった方法で解決されるのである。機能はお互いに新しい複雑な関係に入る。知覚や注意や行為に対しても同じことが当てはまる。」²⁵⁾

ここで、青少年にとって記憶することは思考することを意味すると述べられているが、これは記憶が思考によって自覚的に用いられていることを意味している。ヴィゴツキーによればある機能が言語的思考と結びつくことはその機能を自覚的に用いることができるようになることを意味する。概念的思考の発達において重要なことはそれが言語的思考自体の自覚をもたらすということである。ヴィゴツキーはこのことを『思考と言語』においては、概念的思考の最も高次の形態である科学的概念についての考察の中で述べている。ここでヴィゴツキーは自覚と言語的思考の作用である一般化を結びつけている。知覚や記憶といった機能が自覚になるのは、それが言語的思考と結びついて一般化された知覚、一般化された記憶になるからだといふヴィゴツキーは言う。何かを意識にもたらすということが言語的思考による一般化を伴うからである。

「私は私自身の記憶を意識の対象とする。ここで抽出が起きる。全ての一般化、抽象は特定の仕方では対象を抽出する。それゆえ、一般化として理解される自覚は、直接に制御をもたらすのである。」²⁶⁾

このように、ヴィゴツキーにおいて、自覚は言語的思考による一般化がもたらすものである。では、一般化を行う言語的思考そのものを自覚するにはどうすればよいか。ヴィゴツキーによれば、科学的概念の獲得がその鍵となる。先に『思春期の児童学』において、ヴィゴツキーが高次の概念的思考が現実を構成する諸連関を、概念間の関係によって示すものであると考えていたことを述べた。ヴィゴツキーのこうした考えは『思考と言語』においては、科学的概念についての彼の作業仮説の中に引き継がれている。ヴィゴツキーによれば科学的概念は、彼が一般性関係と呼ぶ、概念間の複雑な関係を示す体系の存在によって特徴づけられる。こうした体系の存在は、科学的概念が対象との直接の関係における一般化によって発達するのではなく、先行の段階の一般化に基づく、一般化の一般化として発達するということを示唆するのである。一般化の一般化によって形成される科学的概念は、言語的思考の自覚をもたらす、それをより高次の段階へと引き上げるのである。

「科学的概念は内的な相互関係のヒエラルキー的な体系をもつ他の概念群によって媒介された、対象と特有の関係を有している。こうした科学的概念の領域において概念の自覚、つまり一般化と制御が始めて発生する。このようにして思想の領域で一度発生した一般化の新しい構造は、その後すべての構造と同じように、訓練なしに思想及び概念の他の全ての分野にも移される。このように、自覚は科学的概念の門を通して表れるのである。」²⁷⁾

外的現実の高次の認識を可能にする科学的概念は、それが一般化の一般化によって発達するゆえに、言語的思考の自覚、及びそうした自覚を伴う高次の言語的思考としての概念的思考を中心に構成された心理諸機能のシステムの形成をもたらすのである。このシステムの形成により、自分の内的操作の自覚と制御が可能になる。このように、ヴィゴツキーの概念発達論においては、自己意識の形成が外的現実の認識の深化と一体になっているのである。

ここまで、概念的思考の発達による現実の認識と自己意識の形成について述べてきた。他者の認識に話に移そう。概念的思考の発達は、よく知られたヴィゴツキーの高次精神機能²⁸⁾の社会的発生の法則に貫かれている。これは、高次精神機能が始めは社会的な協同の

過程で発生し、後に内化して個人の心理機能へと姿を変えるというものである。

「子どもの文化的発達におけるすべての機能は、二度、二つの局面に登場する。最初は、社会的局面であり、後に心理的局面に、すなわち、最初は、精神間カテゴリーとして人々の間に、後に精神内カテゴリーとして子どもの内部に登場する。このことは、随意的注意にも、論理的記憶にも、概念形成にも、意思の発達にも、同じように当てはまる。」²⁹⁾

概念的思考もまた、上記の法則に従って社会的に発生する。つまり、概念的思考の発達はコミュニケーションの発達の産物であり、自己意識は内部へ転移された社会的意識なのである。このように社会的関係に起源をもつ概念的思考の発達と自己意識の形成は、ひるがえって他者の理解をより高次の段階へと高める。

「自己意識の発生とともに、青少年ははるかに深くて広い他者理解が可能になる。人格の形成をもたらし社会的発達は、自己意識の発達にそのさらなる発達の支えを得るのだ」³⁰⁾

他者との協同に起源をもつ概念的思考が自己意識の形成とともに、他者に対する理解の深化をもたらしのである。ヴィゴツキーは他者の理解についてこれ以上は語っていないため、どのような理解の深化が想定されていたかをうかがい知ることはできない。しかし、上記の引用からヴィゴツキーが他者との協同を心理的発達の原動力と位置づけるだけではなく、自己意識の形成を経たより高次の他者理解や協同の発達を想定していたことがわかる。

C 必然性の認識から行為の支配へ

ここまでの考察から概念的思考によって認識が可能となる必然性の領域が何であったかがわかる。それは外的現実、自己、他者という概念的思考の発達によって可能になる三つの領域における必然性の認識である。高次の概念的思考においては、外的現実を構成する諸連関の認識や、それを反映する自分自身の心理的過程の認識、また自分自身の心理的過程の認識に基づく他者の認識がもたらされ、遊びのルールに比べてはるかに高いレベルで必然性の認識が成立していると言える。

第1章において、必然性の認識はそれに自ら従って行為することを喜びとする感情の創出と、必然性の認識に基づく自分自身の行為の支配、つまり自由の獲得としての道徳的発達をもたらしを見た。外的現実、自己、他者の領域における必然性の認識とともに、これら三つの領域の必然性の認識に基づく自分自身の行為の支配が可能になると考えられる。これは遊び論で述べられていた、遊びのルールの認識に基づく行為の支配に比べてはるかに高いレベルでもたらされる行為の支配であると言えることができる。遊びにおける子どもの自分自身の行為の支配は、遊びという行為の中で無自覚的に行われているものであり、自己意識を伴って自覚的に行われているものではない。概念的思考の発達は自己意識の形成を伴うので、自分自身の行為の支配は自覚的に行われる。一方、外的現実や他者に対する必然性の認識も、概念的思考においては遊びの中で子どもが認識するものよりはるかに高次の段階に達しており、自分自身の行為をこれらの領域の必然性に即して支配していくことが可能になると考えられる。

このように考えるならば、ヴィゴツキーの心理学における概念的思考の発達を、高次の認識の発達が高次の道徳的発達をもたらし、包括的な心理的発達の過程として捉え直すことができるだろう。

第4章 おわりに

本稿ではヴィゴツキーの心理学研究において概念的思考の発達が認知的発達と道徳的発達を統一した過程として想定されていたことを検討することを試みた。

そのために、第1章では従来遊び論の中で論じられてきた認知的発達と道徳的発達との統一的過程が、概念発達論においても想定されていたことを指摘した。堀村と神谷によるヴィゴツキーの遊び論の考察に基づき、遊びにおける子どもの内的ルールの形成が、スピノザ哲学の立場から必然性の認識による新たな喜びの感情の創出として捉えられることを示した。必然性の認識は、それに従うことを喜びとする感情とともに、必然性の認識に基づく自分自身の行為の支配、つまりは自由の獲得を可能にし、道徳的発達を導くものであることを確認した。また、ヴィゴツキーが『思春期の児童学』において必然性の認識が高次の概念的思考においてのみ可能になると述べていたことから、遊び論の中で論じられていた認知的発達と道徳的発達との統一的過程が、概念的思考の発達において最も高次の段

階に至ると考えられていたことを指摘した。

第 2 章では概念的思考の発達によって可能になる必然性の認識の内容について検討した。そこで明らかになったのは概念的思考の発達によって外的現実、自己、他者という三つの領域における必然性の認識がもたらされるということであった。ここから、概念的思考の発達はこれら三つの領域における必然性の認識に基づく自分自身の行為の支配を可能にし、道徳的発達を導くものであることを明らかにした。

本稿は従来、認識的発達の過程と考えられてきたヴィゴツキーにおける概念的思考の発達を、道徳的な発達をも含んだより包括的な人間の心理発達の過程として捉え直す可能性を提示することができた。最後に残された課題を三つ指摘しておきたい。ただし、いずれの課題もヴィゴツキーの研究が彼の死によって中断されているため、資料上の制約があることが予想される。

第一に、ヴィゴツキーの心理学における概念的思考の発達と感情の発達との関係がどのように構想されていたかを明らかにすることである。第 1 章で見たように、ヴィゴツキーの概念発達論が感情の発達との関係の中で考えられていたことは明らかである。しかし、認識における発達と感情の発達がともに明示的に論じられていた遊び論とは違い、ヴィゴツキーの概念発達研究において感情の存在は背後に隠れている。こうした観点から考えるならば、ヴィゴツキーが『思考と言語』の第七章において「思想の背後には情動的、意志的傾向がある。これのみが思考の分析における最後の“なぜ”に答えることができる」³¹⁾と述べていることは注目に値する。概念的思考の背後にはそれを突き動かす情動の存在が想定されていることがわかる。

第二に、概念的思考によって可能になる外的現実、自己、他者の必然性の認識について、その内容を具体的に明らかにしていくことである。この課題に関しては、ヴィゴツキーの概念発達研究が未完成であるため、彼の研究の路線を引き継いだ研究の継続が求められているといえる。ヴィゴツキーが概念的思考の高次の形式である科学的概念の研究に着手した『思考と言語』の第六章も科学的概念が教授・学習過程における生活的概念との弁証法的な相互作用によって発達するという作業仮説の提示に留まっているのである。

第三に、ヴィゴツキーが自由と必然性の認識との関係をどのように考えていたかを、関連する論者をヴィゴツキーが自分の心理学研究の中にどのように位置づけ、解釈していたかを含めて、より具体的に解明して

いくことである。例えば遊び論では、遊びにおける内的ルールの確立がスピノザの哲学を背景として論じられており、神谷はそうしたヴィゴツキーの主張の背後に必然性の認識による自由の獲得を読み取っていた。一方、ヴィゴツキーは概念発達論の文脈においてはエンゲルスの自由と必然性の関係をエンゲルスの『反デューリング論』からの引用に基づいて論じていた。ヴィゴツキーが自由と必然性の関係をどのように考えていたかは、スピノザやマルクス、エンゲルス、ヘーゲルなどの論者の思想を彼がどのように捉え、自らの心理学研究の文脈に位置づけていたかということも踏まえて論じていく必要があると言える。

注

- 1) ヴィゴツキー, L.S. 1989. 「子どもの心理発達における遊びとその役割」『ごっこ遊びの世界－虚構場面の創造と乳幼児の発達』神谷栄治訳, 法政出版, pp.2-34.
- 2) ヴィゴツキー, L.S. 1992. 「就学前期児童心理学構成のためのヴィゴツキーの概要メモから」エリコニン, D.B. 『遊びの心理学』天野幸子・伊集院俊隆訳, 新読書社, pp.397-404.
- 3) 『教育心理学講義』においても子どもの道徳的行動の教育について論じられているが、この著作はまだヴィゴツキーの心理学研究の中核をなす高次精神機能の発達についての考えが示される以前のものであり、バヴロフの反射学の理論を背景として書かれている。
- 4) 神谷栄司『保育のためのヴィゴツキー理論－新しいアプローチの試み－』三学出版, 2007.
- 5) 神谷栄司『未完のヴィゴツキー理論－甦る心理学のスピノザ－』三学出版, 2010.
- 6) 堀村志をり 2010. 「遊びのルールに見るヴィゴツキーの^{エチカ}倫理－自由意志概念をめぐるデカルトとスピノザの議論を通して－」『ヴィゴツキー学』別巻第 1 号, pp.37-68.
- 7) ヴィゴツキー, 前掲論文 (1989), p.13.
- 8) 同上, p.13.
- 9) 同上, p.22.
- 10) 同上, pp.27-28.
- 11) 堀村, 前掲論文 (2011), p.58.
- 12) スピノザ, B.D. 『エチカ(下)』畠中尚志訳, 岩波文庫, 1951, p.20.
- 13) 堀村, 前掲論文 (2011), p.64.
- 14) スピノザ, 前掲書 (1951), p.123. (括弧内は引用者による補足)
- 15) 神谷, 前掲書 (2010), pp.279-280.
- 16) 同上, pp.299-300.
- 17) Vygotsky, L.S. 1997b. On psychological systems. In Rieber, R.W. & Wollock, J. (Eds.), *The collected works of L.S. Vygotsky, Vol. 3: Problems of the theory and history of psychology*. New York: Plenum Press, p.103.
- 18) スピノザの『エチカ』の第二部定理四十備考二を参照のこと。(スピノザ, B.D. 『エチカ(上)』畠中尚志訳, 岩波文庫, 1951, pp.142-143.
- 19) Vygotsky, L.S. 1998. *Pedology of the adolescent. The collected works*

- of L.S.Vygotsky, Vol. 5: *The history of the development of higher mental functions*. New York: Plenum Press.
- 20) Ibid., p.148.
- 21) Vygotsky, L.S. 1987. Thinking and speech. In Rieber, R.W. & Carton, A.S. (Eds.), *The collected works of L.S.Vygotsky, Vol. 1: Problems of general psychology*. New York: Plenum Press.
- 22) Vygotsky, 1998., op.cit., p.147.
- 23) Ibid., p.53.
- 24) Ibid., pp.48-49.
- 25) Ibid., p.182.
- 26) Vygotsky, 1987., op.cit., p.191.
- 27) Ibid., p.191.
- 28) 高次精神機能とは、文化的発達のプロセスによって形成される動物とは質的に区別される人間の心理のあり方である。
(Vygotsky,L.S. 1997a. The history of the development of higher mental functions. In Rieber, R.W. (Eds.), *The collected works of L.S.Vygotsky, Vol. 4: The history of the development of higher mental functions*. New York: Plenum Press.)
- 29) Ibid., p.102.
- 30) Vygotsky, 1998., op.cit., p.181.
- 31) Vygotsky, 1987., op.cit., p.282.

(指導教員 秋田喜代美教授)